

「未来の子ども守って」

広島原爆の日

薩摩川内市
春田さん親子

慰霊碑に祈り

「原爆のむごさを語り継ぎ、伝えていく責任がある」。9歳の時に被爆した薩摩川内市祁答院の春田理恵子さんの82日は6日、広島市であった平和記念式典に参列し、そう誓った。鹿児島県代表として娘の真未子さん(9)も出席。原爆死没者慰霊碑に向かって親子は「大勢の人が平和を願う強い気持ちを感じる」と手を合わせた。

〔一面参照〕

理恵子さんは73年前、広島市内で被爆した。「よく晴れた夏空に、突然入道雲より大きく白い雲が現れた」と覚えている。

断片的な記憶しか残っていない。ただ、爆心地から約3・2キロにある自宅に向かって、父親と2歳年上の姉と歩いた自分の姿は、今

も鮮明に思い出せる。

自宅には母親と2人の妹が待っていた。道中は焼け野原。性別が分からないほど、人が焼けただれていた。死んでいる人も、息をしようこめいている人もいた。その上をまたぎ、押しつけ、飛び越えた。肩から水筒を掛けて

いた。「水がほしい。倒れ込んだ人に、すがられた。振り払うように

父親の背中を追い、手で水筒をしっかりと押さえた。その時の気持ち。何年たってもよみがえり、自らを苦しめる。「人間として最も醜い面を、一生抱えて生き続けなければならな

い。それが戦争ではな

3日後、列車で広島をたち、3日かけて両親の実家があるさつま町に避難した。数日後、近くの小学校で玉音放送を聞き、終戦を迎えた。

原爆の投下から73年目のこの日、理恵子さんと真未子さん親子は、およそ10年ぶりに広島を訪れた。理恵子

さんは式典の最中、被爆直後に亡くなった友達のことを思い出したという。体力的に今回の参列が最後と考えていた。しかし、気力が続く限り、この地を訪れ、平和を願い続けたいと思いを直した

〈原爆忌まつり〉とく

式典後、理恵子さんは俳句を詠んだ。平和記念日を表す「原爆忌」を使い、「失った命は取り戻せない。その意味を忘れないでいてほしい」と広島の方言を交えて表現した。

「戦争や核兵器は絶対に許してはいけない。未来の子どもを、みんなで守る責任がある」。原爆死没者慰霊碑の前で、親子は改めて訴えた。(中略)

「言の葉におさまりきれぬ原爆忌」



手作りの折り鶴を持って祈りをささげる春田理恵子さん(写真右)と真未子さん
11日、広島市の平和記念公園